

処方番号：77

処方名：酸棗仁湯（さんそうにんとう）

処方構成：

酸棗仁 7-15、知母 3、川芎 3、茯苓 5、甘草 1

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度以下から虚弱で、心身が疲れ、精神不安、不眠などがあるものの次の諸症

効能・効果：

不眠症、神経症

原典：金匱要略

出典：

解説：

原典に「虚勞、虚煩、眠るを得ず、酸棗仁湯之を主る」とあり、心身疲労し又は病身、高齢者などで体力が衰え、不眠や夜間目が冴えて眠れないものに用いられる。また虚勞からくる嗜眠、神経衰弱、盗汗、健忘症、驚悸、心悸亢進症、眩暈、多夢、神経症などに応用される。

酸棗仁は緩下作用があるから、下痢しているもの、下痢の気味がある者には用いない方がよい。酸棗湯とも云われる。三黄瀉心湯や黄連解毒湯の実証の不眠と区別しなければならない。

77. 酸棗仁湯

参考文献名		酸棗仁	知母	川芎	茯苓	甘草	用法・用量
診療の実際	注1	15	3	3	5	1	*1
処方解説	注2	15	3	3	5	1	
明解処方	注3	15	3	3	5	1	
漢方入門講座	注4	18	2	2	2	1	
漢方医学	注5	10	3	3	5	1	
漢方あれこれ		15	3	3	5	1	
大塚:治療の実際	注6	15	3	3	5	1	

*1 別名 酸棗湯。酸棗仁は半分ぐらいに減量してもよい。水500ccをもって酸棗仁を煮て400ccとし、諸薬を入れ、再び煮て300ccとし、3回に分けて温服する。一般には同時に煎じて用いるが、論の指示に従うがよい。

〔注1〕 体力が衰えて虚証になっている患者で、不眠を訴えるもの。虚煩眠るを得ずというのは、腹も脉も虚状を呈していて、煩悶して眠れないものをいう。不眠を治するのみならず、虚勞からくる嗜眠にも用いる。また神経衰弱に伴う不眠、盗汗をも同時に治す。ただし下痢しているもの、下痢の気味のあるものには用いない方がよい。

〔注2〕 虚勞病(疲勞病)で、虚煩眠るを得ずというのが目標である。体力が衰え、元気がなく、腹も脉も虚状を呈し、胸中が苦しく、煩えて眠ることができないもの。不眠症、嗜眠症、神経衰弱、盗汗、健忘症、驚悸、心悸亢進症、眩暈、多夢、神経症等に應用される。

〔注3〕 水や血を亡失して煩する虚煩である本方の反対は病邪が充満して煩する実煩で、胃部の痞硬、腹部堅満などの充実の症があり黄連解毒湯などの適応症である。貧血性不眠症。

〔注4〕 応用の範囲は不眠症ばかりでなく、神経衰弱、心悸亢進症、嗜眠、眩暈、多夢、煩驚、神経質、神経過敏症、出血後などにも使う。

〔注5〕 心身が疲勞して眠ることができないものに用いる。漢方医学には、近代医学でいう睡眠薬に該当するものはなく、それぞれの患者の症状を診察して、それに応じた薬を用いる。その薬がうまく証に適中すれば、自然に眠れるようになり、薬の副作用や習慣性を顧慮する必要はない。

〔注6〕 心身疲勞して、殊に心気疲れて眠ることのできないというものによい。盗汗がやんだり、便通がついたりする。また嗜眠にも用いる。慢性病のある人、虚弱な人、老人などで、夜間眼が冴えてねむれないというものによい。

処方番号：78

処方名：三物黄芩湯（さんもつおうごんとう）

処方構成：

黄芩 3、苦参 3、地黄 6

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度あるいはそれ以下で、手足のほてりがあるものの次の諸症

効能・効果：

湿疹、手のひら・足の裏のあれ、不眠

原典：金匱要略

出典：

解説：

原典の『金匱要略』には四肢煩熱に苦しむを目標とし、尾台榕堂の『類聚方広議』には、産後の発熱、産褥熱や水虫に用い、この場合熱が出ると、手足を蒲団から外に出したが、足の裏を冷やすことを好むと誌している。血熱からくる頭痛、肺結核の一症、神経症、不眠、湿疹、水虫、凍傷、口内炎、進行性指掌角化症などに応用される。

78.三物黄芩湯

参考文献名		黄芩	苦参	地黄	用法・用量
診療の実際	注1	3	3	6	
後世要方解説	注2	3	3	6	
漢方入門講座	注3	1.5	3	6	
漢方医学	注4	3	3	6	
治療の実際	注5	3	3	6	

〔注1〕 血熱を治す方。手足の煩熱と頭痛とを目標とする。多くは口渴または口乾をともなう。産褥熱，肺結核，不眠，皮膚病，口内炎等に応用。

〔注2〕 多く虫を吐下するとあり，神経症，産褥熱，頭痛，手足の煩熱，不眠症，水虫などに応用。

〔注3〕 発熱，四肢煩熱を目標にして，産褥熱，凍傷に用う。

〔注4〕 四肢の煩熱を目標とする。患者は手足に気持のわるい熱感を覚えて，蒲団の外に出して冷たいものに触れるのを好む。産褥熱，肺結核，不眠症，汗疱状白癬，膿疱症，湿疹，口内炎に応用。

〔注5〕 手足の煩熱のために眠れないものに用いる。故人が血熱とよんだものに用いる。血熱では手足がひどく腫れる。水虫に効があった。

処方番号：79

処方名：滋陰降火湯（じいんこうかとう）

処方構成：

当帰 2.5、芍薬 2.5、地黄 2.5、天門冬 2.5、麥門冬 2.5、陳皮 2.5、白朮あるいは蒼朮 3.5、知母 1.5、黄柏 1.5、甘草 1.5、大棗 1、生姜 1 （大棗、生姜はなくても可）

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱で、のどにうるおいがなく、たんが切れにくくてせきこみ、皮膚が浅黒く乾燥し、便秘傾向のあるものの次の諸症

効能・効果：

気管支炎、せき

原典：万病回春

出典：

解説：

朱丹溪の唱えた「陽余りあり陰不足す」から陰を滋し、肝腎の火を降すをもって本方の名がある。古方の麦門冬湯証に似ていて、それに貧血の薬を加えたもので、皮膚は浅黒く乾燥、便秘がちのものを目標とする。皮膚蒼白で発汗、咳嗽、吐痰が多く、胃腸弱く下痢しやすいものには禁忌である。原方では当帰は酒に浸し、黄柏は蜂蜜に浸して炒り、甘草は炙ることになっている。一般にはこれらの修治は省略している。

79.滋陰降火湯

参考文献名	当帰	芍薬	地黄	天門冬	麦門冬	陳皮	朮	知母	黄柏	甘草	大棗	生姜	白朮
処方分量集	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1.5	1.5	1.5	-	-	-
診療の実際 注1	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1.5	1.5	1.5	-	-	-
診療医典 注2	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1.5	1.5	1.5	-	-	-
症候別治療 注3	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1.5	1.5	1.5	-	-	-
処方解説 注4	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	-	1.5	1.5	1.5	-	-	3
後世要方解説 注5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	-	1	1	1	1	1	3
漢方百話 注6	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1	1	1	-	-	-
応用の実際 注7	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1.5	1.5	1.5	-	-	-
明解処方 注8	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1.5	1.5	1.5	1	1	-
漢方医学	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	2.5	3	1.5	1.5	1.5	-	-	-

[注1] [注2] [注5] 肺結核の一症，乾性胸膜炎，急性・慢性気管支炎。

[注3] 咳嗽，嘔声。

[注4] 増殖型肺結核，乾性肋膜炎。

[注6] 慢性気管支炎に移行し，消耗熱が続き，体液虚耗し，皮膚乾燥し，乾性の咳が出て，喀痰は少なくかつ切れ難く，便秘がちで，聴診上乾性「ラ」音で長びくものによい。

[注7] 急性・慢性気管支炎，肺結核，肋膜炎，腺病質。

[注8] 肺結核，乾性肋膜炎。

参考：矢数有道（漢方と漢薬 第5巻 八号）は，陰虚火動，咳嗽，吐痰，皮膚浅黒く，大便硬く，之を聴診して乾性「ラ」音のもの之を主るといふ。

処方番号：80

処方名：滋陰至宝湯（じいんしほうとう）

処方構成：

当帰 2-3、芍薬 2-3、白朮あるいは蒼朮 2-3、茯苓 2-3、陳皮 2-3、柴胡 1-3、知母 2-3、香附子 2-3、地骨皮 2-3、麦門冬 2-3、貝母 1-2、薄荷葉 1、甘草 1

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱なもの次の諸症

効能・効果：

慢性のせき、たん、気管支炎

原典：万病回春

出典：

解説：

原典の『万病回春』では、さらに生姜が加わった処方である。

80.滋陰至宝湯

参考文献名	当 帰	芍 薬	朮	白 朮	茯 苓	陳 皮	柴 胡	知 母	香 附 子	地 骨 皮	麦 門 冬	貝 母	薄 荷 葉	甘 草
処方分量集	3	3	3		3	3	1	3	3	3	3	1	1	1
診療医典 注1	3	3	3		3	3	3	3	3	3	3	2	1	1
診療の実際	3	3	3		3	3	1	3	3	3	3	2	1	1
現代漢方入門	2	2	2		2	2	1	2	2	2	2	2	1	1
漢方大医典	3	3	-	3	3	3	1	3	3	3	3	2	1	1
漢方あれこれ	記載なし													
後世要方解説	記載なし													

【注1】(1)気管支拡張症（肺結核に併発した気管支拡張症で、せき、痰の他に、食慾不振、盗汗などがあって、衰弱しているものに用いる。）(2)肺結核（慢性の経過をたどる場合であるが、病気が進み、熱もあり、せき、口渇、盗汗などがみられるものによい。婦人の患者では月経不順のことが多い。

参考：万病回春を原典とする滋陰至宝湯は当帰2.5、芍薬2.5、朮3.0、陳皮2.5、知母1.5、甘草1.5、地黄2.5、天門冬2.5、黄柏1.5、生姜1.0で応用の実際によれば体力が衰えた衰弱傾向の人の慢性に経過した咳嗽に用いる。衆方規矩によれば婦人の諸種の消耗性疾患で、経絡血脈が不調となり、四肢身体が痩せ、月経不順を治し、衰弱脱力を補い、消化をよくし、心肺を養い体痛をとるなどの奇効があるという。

処方番号：81

処方名：紫雲膏（しうんこう）

処方構成：

紫根 100-200、当帰 60-10、豚脂 20-30、ミツロウ 300-400、ゴマ油 1,000

用法・用量：

外用

しばり：

（しばりなし）

効能・効果：

ひび、あかぎれ、しもやけ、魚の目、あせも、ただれ、外傷、火傷、痔核による疼痛、肛門裂傷、かぶれ

原典：春林軒膏方

出典：

解説：

別名 潤肌膏

まずゴマ油を煮て、蜜蠟、豚脂を入れて溶かし、次いで当帰を入れる。当帰の色が焦げるのを度として火力を増し、紫根を入れて2-3沸させ、鮮明な紫赤色になったら速やかに火よりおろし布でこす。紫赤色鮮明を上品とする。紫根を入れるときの温度は14℃位がよい。蜜蠟は夏は多く冬は減少する（『漢方主要処方解説』を参照とした）。

81.紫雲膏

参考文献名		ゴ マ 油	ミ ツ ロ ウ	豚 脂	当 帰	紫 根
金創膏薬諸方	注1	40銭	夏15銭 冬10銭	1銭	5銭	4銭
処方解説	注2	1000	380	25	100	100
診療医典	注3	1000	380	25	100	100
治療の実際	注4	1000	380	25	100	100
応用の実際	注5	1000	380	25	100	100
漢方	注6	1000	380	25	100	100
処方集	注7	1000	380	25	100	100
民間薬百科	注8	12	380	25	100	100
明解処方	注9	1000	300～ 400	30	80	120
漢方薬入門	注10	1000	300～ 400	30	80	120
第7薬局方	注11	1000	340～ 400		60	120
第3薬局方	注12	1000	340～ 400	20	60	120
処方分量集		1000	380	25	100	100

〔注1〕 一名紫雲愈、或カブレニ用

能肌ヲ潤シ愈ス、高下ノ肉ヲ平ニス。又瘡痕色変シタルニ貼ス、又毒浅キ処、結毒痔疾ニテモ毒アサクカブルル者ニ用ヒテヨシ

〔注2〕 肌の乾燥、荒れ、潰瘍、増殖性の皮膚異常を目標とするが、しかし必ずしも乾燥したものに限ることはない。

湿疹・乾癬・角皮症・水虫・鶏眼（うおの目）・胼胝（たこ）・膿加疹・面疱（にきび）・水疱・疣贅（いぼ）・ひび・あかぎれ・あせも・かぶれ・わきが・円形脱毛症、白癜風・白癬（しらくも）等の皮膚疾患、外傷（切傷・擦過傷・打撲傷）・凍傷・褥瘡・火傷・螫刺・潰瘍・下腿潰瘍・瘻孔・痔・痔瘻・脱肛・瘰癧・糜爛等の外科的疾患、とくにアンダーラインの疾患によく奏効するようである。

〔注3〕 肌の乾燥、荒れ、潰瘍、増殖性の皮膚異常を目標とする。しかし必ずしも乾燥したものとは限らない。

湿疹、乾癬、角皮症、水虫、うおのめ、たこ、膿痂疹、面疱、疣贅、ひび、あかぎれ、あせも、かぶれ、わきが、円形脱毛症、白癜風、しらくもなどの皮膚疾患、外傷、凍瘡、褥瘡、火傷、螫刺、潰瘍、下腿潰瘍、瘻孔、痔、痔瘻、脱肛、瘰癧、びらんに応用される。

〔注4〕 凍傷、火傷、擦過傷、打撲傷、切瘡、下腿潰瘍

〔注5〕 外傷に塗布すると、止血、鎮痛の効があり、挫創などでも肉芽の新生が速い。擦過傷に用いると、一時滲出液が増加することがある。火傷に用いると、痛みがすぐ止まる。二度程度の火傷なら、傷あとはけっして残らない。しかし火傷に用いるときは、患部に広めに十分に薬を塗布することが大事である。痔や脱肛には、患部を清拭してから塗布する。

外傷、火傷、凍傷、痔、脱肛、水虫、打撲、化膿性腫物の初期等に応用される。

〔注6〕 外傷，ひび，あかざれ，しもやけ，火傷，ただれ，湿疹，あせも，痔核，痔出血，脱肛，肛門裂傷，潰瘍，顔の皮膚のあれ

〔注7〕 虚証，貧血性乾燥性の外傷皮膚病を目標とし，火傷，しもやけ，ひび，あかざれ，いば，潰瘍，外傷，痔漏，水虫，ようのめ等に応用される。

〔注8〕 火傷，凍傷，ひび，あかざれ，すりむき，切り傷，癩疽，下腿潰瘍，痔核，水虫，炎症性のはれもの，

〔注9〕 ①化膿していない ②分泌物が多くない ③深い切傷でない，等を目標とし，婦人絞肌(根本治療には駆瘀血剤の内服が必要)，凍傷，火傷，ひび，あかざれ，痔核，脱肛，湿疹に応用される。

〔注10〕 皮膚病その他皮膚損傷などで化膿していないものを目標とし，凍傷，火傷，ひび，あかざれ，水虫，魚の目，たこ，痔核，脱肛，湿疹，角皮症に応用される。

〔注11〕 火傷，痔，凍傷，切傷，肉芽形成

〔注12〕 防腐，肉芽発生

処方番号：82 処方名：四逆散（しぎやくさん）

処方構成：

柴胡 2-5、芍薬 2-4、枳実 2、甘草 1-2

用法・用量：

（1）散：1回 2-2.5g 1日3回

（2）湯

しばり：

体力中等度で胸腹部に重苦しさがあり、ときに不安、不眠などがあるものの次の諸症

効能・効果：

胃炎、胃痛、腹痛、神経症

原典：傷寒論

出典：

解説：

（1）処方甘草、柴胡、芍薬、枳実は各等分となっている。（2）『傷寒論』では散剤の方を重湯にまぜて服用させている。（3）本方は大柴胡湯と小柴胡湯の中間に位するものに用いる方剤である。（4）本方は大柴胡湯の黄芩、半夏、大黃、生姜、大棗の変わりに甘草を加えたものであるから嘔吐、便秘などの症状がなくて急迫性の心下痛が強い場合に用いる。

82.四逆散

参考文献名		柴胡	芍薬	枳実	甘草
処方分量集		5	4	2	1.5
診療医典	注1	5	4	2	1.5
応用の実際	注2	5	4	2	2
診療の実際		5	4	2	1
漢方あれこれ		5	4	2	1.5
明解処方		2	2	2	1

〔注1〕 胆嚢炎，胆石症，胃炎，胃潰瘍，鼻炎，神経症，血の道症などに用いる。

〔注2〕 胃炎，十二指腸炎，胃・十二指腸潰瘍，胆嚢炎，胆石症，神経症，鼻炎，膵臓症などに用いる。

処方番号：82A

処方名：解勞湯（かいろうとう）

処方構成：

芍薬 4-6、柴胡 4-6、土別甲 2-4、枳実 2-4、甘草 1.5-3、茯苓 2-3、生姜 2-3、大棗 2-3

用法・用量：

湯

しばり：

体力中等度あるいはやや虚弱で、腹胸部に重苦しさがあり、ときに背中に痛みがあるものの次の諸症

効能・効果：

慢性の発熱、腹痛、胃痛

原典：楊氏家蔵方

出典：

解説：

『勿誤藥室方函口訣』に「この方は四逆散の変方にて所謂痙癰（げんぺき）勞を為す者に効あり。又骨蒸の初期に用ゆべし。眞の虚勞には効なし。又四逆散の症にして腹中に堅塊ある者に用ひて特驗あり。」と記載されている。神経質でやや虚証で腹痛などを訴え、腹壁が強く緊張しているタイプに用いる。臨床では虚証で神経質な胆嚢症（胆嚢炎、胆のう結石、胆のうジスキネジー）の患者に用いる機会が多い。

82A. 解勞湯

参考文献名	芍薬	柴胡	龍甲	土別甲	枳殻	枳実	炙甘草	甘草	茯苓	生姜	乾生姜	大棗	用法・用量
漢方診療医典	4	5		3		2		1.5	3	2		2	*1
漢方処方応用の実際 注1	4	5		3		2		1.5	3	2		2	
新版漢方医学	4	5		3		2		1.5	3	2		2	
成人秒の漢方療法 注2	4	5		3		2		1.5	3	2		2	
1000万人の漢方診断と治療の実際	4	5		3		2		1.5	3	2		2	
臨床応用漢方処方解説 注3	4	5		3		2		1.5	3		1	2	
金匱要略入門 注4	一兩半	一兩	一兩		一兩		半兩		半兩	三片		一枚	
症候による漢方治療の実際	4	4		3		2		2	3	3		3	
経験・漢方処方分量集	6	4		4	4			2	2		1	2	
漢方薬入門 注5	6	4		4	4			2	2		1	2	
改定新版漢方処方分量集 注6	4	6		2		2		3	3		1	3	

*1 毎服五錢を水一盞半をもって、生姜三片、棗子一枚をいれ煎じて七分に至り、食後に温服せよ。

注1

四逆散の証で、腹部に胆石のような堅塊があって、病気が慢性になったもの、四逆散の証に似て、さらに虚弱なものや、体力が衰え、あるいは心下部の振水音を伴うもの。平素は健康な人が過労により種々な症状を呈するものなどの場合で、発熱または微熱があり、あるいは無熱で、上腹痛、胸痛、悪心、嘔吐などが起こり、胸脇苦満があり、あるいは疲労、腰痛など訴えるものである。本方は四逆散に土別甲、茯苓、大棗、生姜を加えたものである。土別甲は強壯の効があって、堅塊を去り、茯苓は停水を去って、土別甲に協力すると考えられる。四逆散と本方との用方の違いは、勿論これらにある。各種の慢性の発熱、マラリヤ、肝炎、胆嚢炎、胆石、十二指腸炎など。

注2

大柴胡湯を用いるタイプに似ているが、やや虚して、腹直筋の緊張しているもので、胆石症や胆嚢炎の症状が長びいているものに用いる。

注3

心下部と胸脇全体が硬くふさがったよう緊張し、実証の腹証で、硬結を触れ、背に徹して痛むいうものに用いられる。すなわち慢性腹膜炎の硬結・胆石症・胆嚢炎・脾臓炎・胃潰瘍などに応用される。

注4

虚勞にて積気が硬結に、胸脇噎塞し背に引いて徹痛するを治す。

注5

胆石症、胆嚢炎これらは通例併発することが多い。胆嚢炎では一般的に胸脇苦満あり、柴胡剤の適応症となる。胆石があるときには疝痛発作を伴う。便秘気味で胸脇苦満があり、胃部膨満感、嘔吐、悪心などあるときには胆石があるときには疝痛発作を伴う。便秘気味で胸脇苦満があり、胃部膨満感、嘔吐、悪心などあるときには大柴胡湯。それよりやや虚しているときには柴胡桂枝湯。虚弱体質の人で、諸症状が緩やかにあらわれるときには小柴胡湯。発熱が長びき、腹直筋が張っていて黄疸のあるときには解勞散。

注6

腹部腫塊、背部に牽引痛、或は発熱。応用 結核性腹膜炎、胆石症、胆嚢炎、胃潰瘍

処方番号：82B

処方名：柴胡疎肝湯（さいこそかんとう）

処方構成：

柴胡 4-6、芍薬 3-4、枳実 2-3、甘草 2-3、香附子 3-4、川芎 3、青皮 2

用法・用量：

湯

しぼり：

体力中等度で、腹胸部に重苦しさがあり、ときに頭痛や肩背がこわばるものの次の諸症

効能・効果：

腹痛、側胸痛、神経痛

原典：医学統旨

出典：

解説：

四逆散に川芎・青皮・香附子が加わったもの。長沢道寿（?～1637）の『増補能毒』には「川芎はいずれの頭痛にも用いるなり、気をめぐらし鬱気を散ず、……、気を散ずる事、風の塵を吹くに似たり、」「香附子は鬱気を開き気を快くす、」「青皮は左脇痛に必ず用いる。胸と脇に気がつかえて痛むに、少腹の疝痛に、乳の腫れたるを消し食を押し下す」とある。四逆散よりも気の鬱滞が強く、胸・脇・腹が痛むものに使われる。気の鬱滞と言う神経的なことだけでなく、腹にガス（気）がたまりやすいことも目標の1つになる。

浅田宗伯の『勿誤方函口訣』には柴胡疎肝湯の項に柴胡疎肝湯は「左脇痛を治す。……。この方は四逆散の加味ゆえ、脇痛のみに限らず、四逆散の証にして肝気（肝が主っている機能）胸脇に鬱塞し、痛みを覚え、或いは衝逆して頭疼、肩背強急する者を治す。」とあり柴胡疏肝散には「瘀血ありて痛みをなす者に宜し」と区別している。

82B. 柴胡疎肝湯

参考文献名	柴胡	芍薬	枳実	甘草	香附子	川芎	青皮	山梔子	乾姜	用法・用量
漢方診療医典	4	4	3	2	3	3	2			
漢方診療医典	4	4	3	2	3	3	2	3	1	
漢方処方応用の実際 注1	4	4	3	2	3	3	2			
漢方処方応用の実際 注2	4	4	3	2	3	3	2	3	1	
新版漢方医学	4	4	3	2	3	3	2	3	1	
症候による漢方診療の実際 注3	4	4	3	2	3	3	2			
症候による漢方診療の実際 注4	4	4	3	2	3	3	2	3	1	
経験漢方処方分量集	6	3	2	2	3	3	2			
現代漢方入門	6	3	2	2	3	3	2			
1000万人の漢方診断と治療の実際	6	3	2	2	3	3	2			
新版改訂漢方処方集	4	4	2	3	4	3	2			

注1

[目標] 浅田の方函口訣に「本方は四逆散の加味方だから、脇痛(側胸やわきばらの痛み)だけでなく、四逆散の症で、肝気が胸脇につまり、痛みをおぼえ、あるいは衝逆(つきあがる)して頭痛や肩背がこわばるものによい」とあって胸や側胸部の痛みで、現代医学的に処置に困るようなものに用いてよいことがある。

[応用] 肋間神経痛。腫瘍による痛みなど

注2

柴胡疎肝散は前方(柴胡疎肝湯)に梔子3.0、乾姜1.0加えたもので、浅田宗伯は瘀血による胸痛によいといい、梧竹楼は、寒熱往来胸熱、吐血するものによいといっている。

注3

勿誤薬室方函には医学統司の柴胡疎肝湯をあげ、その口訣の条で、次のようにのべている。この方は四逆散(柴胡、芍薬、枳実、甘草)に加味したのだから、脇痛に用いるばかりでなく、四逆散の証で、肝臓の機能がわるくなって、胸脇が鬱塞して痛みを覚え或は衝逆して頭痛がしたり、肩や背が強ばりひきつれる者を治す効がある。

注4

柴胡疎肝散は張医通の方で、医学統司の柴胡疎肝湯に梔子と乾姜を加えたもの。医通の方の処方方は、瘀血があつて痛むものによい。

処方番号：83

処方名：四逆湯（しぎやくとう）

処方構成：

甘草 2-4.8、乾姜 1.5-3.6、加エブシ 0.3-2.4

用法・用量：

湯

しぼり：

体力虚弱あるいは体力が消耗し、手足が冷える人の次の諸症

効能・効果：

感冒、急・慢性胃腸炎、下痢、吐き気

原典：傷寒論

出典：

解説：

新陳代謝機能が極度に沈衰しているものを振興鼓舞させるときに用いる。

裏（胃腸）の寒を温散し、四肢の厥逆（末端より血行が絶えて冷えてくる）を主治するので、これを四逆湯と名づけた。適当な治法を誤った場合に起こる病態に用いるものである。すなわち本方は発汗過度により、あるいは誤って発汗したり、誤って下したりして、手足が厥冷し、脈微虚となったもの、また感冒・下痢症・吐瀉病・コレラ・急性食餌中毒・急性、慢性胃腸炎・消化不良症・吃逆（しゃっくり）・外傷や手術または分娩等で失血甚だしく、心臓衰弱し、手足厥冷した場合・黄疸・中寒・陰症の浮腫等に応用される。虚弱者や体力消耗者で手足が冷える人に使用される。かぜ、肺炎、胃腸型感冒、急・慢性胃腸炎、下利、吐き気に効果がある。

大塚敬節『症候による漢方治療の実際』には「この方は甘草乾姜湯に附子を加えたもので、激しい下痢に嘔吐を伴い手足の厥冷するものに用いる。急性吐瀉病で、一般状態がわるく、脈も弱く予後気ずかわれる様なものに用いる。傷寒論に“上には吐き、下には下痢し、冷汗が流れ、発熱、悪寒もあり、四肢が引きつれ、手足が厥冷するものは四逆湯の主治である。”とあって、この方は“寒”を去って、新陳代謝を旺盛にする方剤であるが、発熱のあるものに用いることもある。」とある。

その使用目標は吉益東洞『方極附言』に「四肢厥逆し、身体疼痛し、下痢清穀、或は小便清利する者を治す」と示されおり、『漢方診療のレッスン』では「感染性下痢で一般状態が重篤なときに用いる。顔面蒼白で、手足が冷え、脈は微弱で、食物を全く消化せずに下痢（完穀下痢）するいうときに用いる。」とある。

83.四逆湯

参考文献名	炙甘草	甘草	乾姜	附子	用法・用量
漢方診療医典 注1		3	2	1.5~1	
臨床応用漢方処方解説 注2		3	2	1.5~1	*1
漢方百話 注3		3	2	1.5~1	
漢方処方応用の実際 注4		3	2	0.5	
傷寒論入門 注5		3	2	0.5	*2
症候による漢方治療の実際 注6		3	2	0.5	
傷寒論梗概 注7		4.8	3.6	2.4	*3
漢方と民間薬百科 注8		3	2	1	
続漢方百話		3	2	1	
漢方薬入門 注9		3	2	1	
改定新版漢方処方分量集 注10		2	1.5	0.5(白川附子1)	*4
漢方講座 1 注11		3	2.5	1.5	
増補改訂漢方入門講座上下 注12		3	2.5	白川附子1	
新撰類聚方 注13	二両		一両半	一枚生用皮去破片(0.3)	*5
現代漢方入門 注14		2	2	0.5	
古方薬囊 注15		2	1.5	0.2生用(白川1)	*6
実用漢方療法		3	2	0.3~1.5	
明解漢方処方集 注16		2	2	1(6)	

*1 水300ccをもって煮て150ccとし、一日二回に分けて温服する。

*2 以上三味、水200ccを以て煮て、120ccをとり濾過して、60cc宛二回温服せよ。体格の大なるものは附子1.0、乾姜を3.0まで増量してよい。

*3 三味を調合し、水約一合五勺を以て、煮て六勺程となし、滓を去って一回に温服する(通常一日二回)

*4 水120を以て煮て50に煮詰め二回分服 便法:甘草3.0、乾姜2.0、白川附子1.0、水半両常煎法

*5 三味、以水三升、煮取一升二合、去滓、分温再服、強人加大附子一枚、乾姜三両。

*6 三味を水六勺(120cc)を以て煮て二、四勺(50cc)となし滓を去り二回に分けて温服すべし。

注1

本方は、新陳代謝機能が極度に沈衰している場合に用い、その機能を振興させる効がある。そこで、本方を用いる患者は四肢厥冷、悪寒、顔色蒼白、下痢、嘔吐、腹痛などがあって、脈微また遅である。ところで裏寒下熱のものでは、顔面は潮紅を呈し、体表に熱感があるので、太陽病の桂枝湯証と誤れることがある。このさい脈は浮遅弱となる。このような場合は、真寒假熱であるから、四逆湯で裏寒を去れば、体表の假熱自ら消散する。本方は甘草、乾姜、附子の3味からなり、甘草乾姜湯に附子を加えたものとみなすことができる。附子は新陳代謝機能の沈衰を振興させる効が顕著であるから、本方は甘草乾姜湯の証に似て、新陳代謝の沈衰がはなはだしい場合に用いる。そこで本方は新陳代謝機能が亢進して病証が発揚性になった場合には用いない。本方は、諸種の熱病、急性吐瀉病、虫垂炎、疫痢などにもちいる機会がある。

注2

・新陳代謝機能が極度に沈衰しているものを振興鼓舞させるときに用いる。裏(胃腸)の寒を温散し、四肢の厥逆末端より血行が絶えて冷えてくる)を主治するので、これを四逆湯と名づけた。適当な治法を誤った場合に起こる病態に用いるものである。すなわち本方は発汗過度により、あるいは誤って発汗したり、誤って下したりして、手足が厥冷し、脈微虚となったもの、また感冒・下痢症、吐瀉病・コレラ・急性食餌中毒・急性、慢性胃腸炎・消化不良症

・吃逆(しゃっくり)・外傷や手術または分娩等で出血甚だしく、心臓衰弱し、手足厥冷した場合・黄疸・中寒・陰症の浮腫当に應用される。

注3

この方は厥陰病の薬だ、新陳代謝機能が極度に沈衰し、脈は微かて遅く、四肢が厥冷し、しばしば下痢清穀止まず、危急に陥ったものを振興させるものである。流感の老人性、無力性肺炎などで下痢するものに用いてよいことがある。

注4

- 1) 誤治を重ねて、発汗が禁忌のものを発汗させて手足が厥冷するもの。
- 2) 嘔吐、下痢が激しく、足厥冷し、脈微弱となったもの、腹が痛むこともある。
- 3) 体表に熱があって、裏(体内)に寒があり、完穀下痢するもの、この場合は脈が浮いて遅であることが特徴である。
- 4) ひどく汗が出て、それにもかかわらず熱が下がらず、腹がひきつれ、四肢もひきつれ痛むもの。
- 5) 下痢しているのに、腹が張り、手足が冷え、脈が弱い。また方読弁解には、完穀下痢するものは、たとえ手足が厥冷せず発熱していても、本方がよいとある。

注5

三因方に、四逆湯は、少陰の傷寒にて自利し渴せず、嘔噦止まらず、或は吐利俱に発し、小便或は澁り或は利し、或は汗出づること過多、脈は微に絶せんと欲し、腹痛脹満し、手足逆冷するとき、及び一切の虚寒厥冷を治す。凡そ傷寒を病みて此証あるはみな陽気虚し裏に寒あるに由る、更に頭痛体疼を覚え発熱悪寒し、四肢は拘急し表裏悉く具わるものと雖も、表を攻むるべからず宜しく先ず此薬を服し以て陽を助け裏を救うべし。又、寒厥或は表熱裏寒、下痢清穀、食入るときは則ち吐し、或は乾嘔、或は大汗大吐大下の後四肢冰冷、五臓拘急し、拳体疼痛し、渴せず、脈の沈伏するものを治するは即ち本方、と記す。

注6

この方は甘草乾姜湯に附子を加えたもので、はげしい下痢に嘔吐を伴ない手足厥冷するものに用いる。急性吐瀉病で、一般状態がわるく、脈も弱く、予後の気ずかわれるようなものに用いる。傷寒論に“上には吐し、下には下痢し、冷汗が流れ、発熱、悪寒あり、四肢がひきつれ、手足が厥冷する者は四逆湯の主治である”とあって、この方は“寒”を去って、新陳代謝を旺盛にする方剤であるが、発熱のあるものに用いることもある。これは古人が真寒假熱とよんだもので、熱はあるが、真の熱ではないと考えた(熱の項をみよ)。呉茱萸湯の嘔吐と区別する必要があるが、四逆湯証は下痢を主とし、呉茱萸湯証では下痢を伴なうことがあっても嘔吐が主である。

注7

これは亡陽の甚しい為に少陰に陥り、己に四肢厥逆、或は下痢清穀等を発する證の薬方であって、主として裏寒を温め、下痢清穀を止め、四肢の厥逆を治する等の能を有する(太陽病)これは脈は浮にして遅、表には尚ほ居熱があるが、裏の寒は己に甚しく、下痢清穀、手足厥逆を發する等の證に對する薬方であって、主として裏寒を温散し、下痢清穀を止め、虚熱を去る等の能を有する。これは己に陰位に陥れるものである。(陽明病)これ等の方は、病が既に進行して増悪し、或は自痢し、或は嘔吐し、或は食物は咽を下らず、或は腹痛する等、皆其の裏の寒が旺盛となる證に對する薬方であって、各々主として其の裏寒を温散する等の能を有する。(太陰病)これは下痢し、脈は微澁で、裏寒が甚しく、四肢は厥逆し、或は嘔して冷汗を出し、或は膈上に寒飲があつて乾嘔する等の證に對する薬方であって、主として陽を回し、裏を温むる等の能を有する。これは少陰正對の薬方である。これは所謂寒厥で、大いに汗が出て、虚熱去らず、腹内は拘急し、四肢は疼み、又下痢厥逆して悪寒し、及び嘔して、脈は弱であるのに又小便を能く利し、身に微熱があるに拘わらず、内の虚寒は甚しい等の證に對する薬方であって主として裏寒を温めて、諸般の苦痛を去る等の能を有する。(少陰病)これは吐瀉し、或は乾嘔が止まず、冷汗が出て、四肢は拘急、手足は厥冷し、或は腹痛し、或は轉筋が起り、或は時に虚熱を發し、脈は微弱を現はす等、即ち陰證の既に重劇に陥れるものの薬方であって、主として裏を温め、寒を散じ、血行を整へ、陽氣を復する等の能を有する。(霍乱病)

注8

急に激しく吐いたり下痢したりして、からだ中の水分が大量に失われて、脈微弱、眼球陥没、手足厥冷(手足が冷たくなる)などがあらわれたものに用いる。

注9

四肢厥冷、消化不良の下痢、嘔吐、尿多量、汗多い、顔面青白く生命力が極度に沈衰し心臓の弱ったもの。

注10

手足冷え、下痢腹満、或は発熱、悪寒頭痛、身疼痛、脈沈又は遅。応用 急性慢性腸炎、感冒

注11

手足冷え或は発熱頭痛、或は下痢腹痛するものを治す。脈沈、沈遅、弱等の場合がある。

応用:感冒、急性慢性腸炎、下痢による誤治の救法

虚寒証、就中寒の度合いが強い。便はあ水様便、水分が多い泥状便、完穀下痢などで、手足が冷え、腹部では急性の時は服満、鈍痛乃至中等度の疼痛を訴えることがある。慢性では殆ど自覚症状がないことが多い。